

育成光線放射装置を使って作物を生産するときの作業を育成光線農法と呼ぶことにしましたので、その作業手順をまとめてみました。

A 種子を活性化させる

育成光線放射装置により、水は0,276nmという極微小な水分子になります。又、一秒間に100兆回という極微細な振動エネルギー体になります。この水は植物の細胞膜を通過することができる大きさで、DNAを活性化させることが可能です。

これにより作物は元気に育つことが出来ると考えています。

*上記のDNAとは、遺伝情報物質そのもので、細胞内の核に含まれている分子を言います。人為的に操作された遺伝子組み換え物質や操作物質とは全く異なるものであります。

方法は次の通りです。

- ① 育成光線装置を使って、育成光線水を作ります。その育成光線水に予定している種を30分程度浸漬（袋ごとでも可です）、この作業をすることでタネは活性化されます。
最近のように地球環境が不安定な時代には、この作業は極めて重要です。この作業を行うことで、作物を安定して生育させることが可能になります。
- ② 育苗箱で苗作りのために育成光線水を使う時は、タネの処理は①と同じです。発芽後は時々育成光線水を散水してください。

B 播種、定植後の処理について

- ① 発芽後は状態に合わせて時おり散水してください。
- ② 定植した作物には、定植後に噴霧程度の散水を行っておくと、土壌をマイナスイオンの環境にすることで、病虫害の予防的な効果があります。尚、やむをえず農薬を使用するときは育成光線水で希釈することで、低農薬栽培が可能です。

<まとめとして>

この育成光線農法とは、装置から放射される4～14ミクロン領域の育成光線が、作物のDNAを活性化させ細胞を元気にする結果として、作物の生育を助け、当然ながら品質の向上を可能にします。また育成光線水は極微細な水分子になるために、結果としてマイナスイオンを帯電したマイナスイオン水となります。このマイナスイオン水はプラスイオンを帯電して生きている病虫害が生息できない環境にすることで、被害を

未然に予防する事ができることとなります。以上のことから以下の通りの農法

*育成光線放射装置とは『育成光線水生成器・気施気きせき』のことです。